

AtermIR450 シリーズ

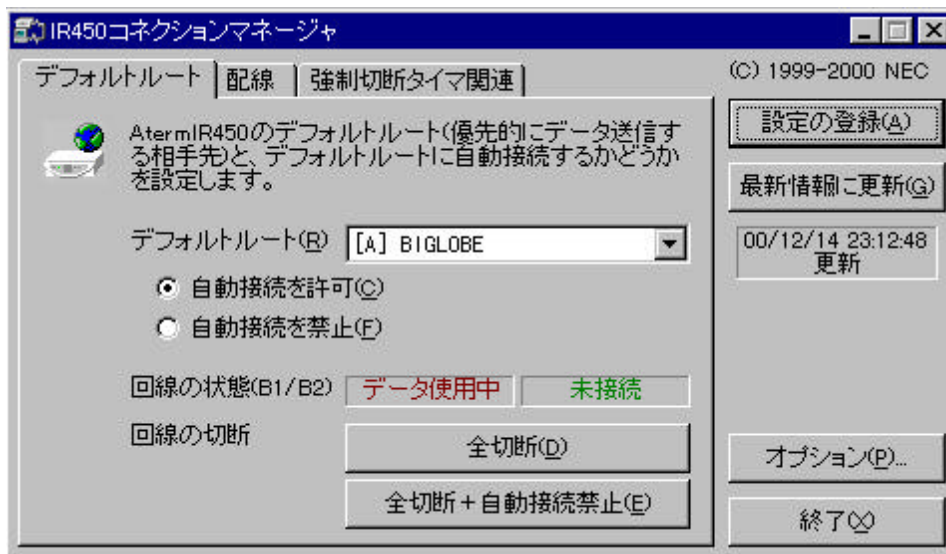
最新ファームウェアおよびユーティリティについて

1. コネクションマネージャについて

Windows 版コネクションマネージャ (バージョン 2.60) より新たに以下の機能が追加されました。

- ・回線使用状態表示
- ・強制切断タイマ稼働による発信制限の確認とクリア

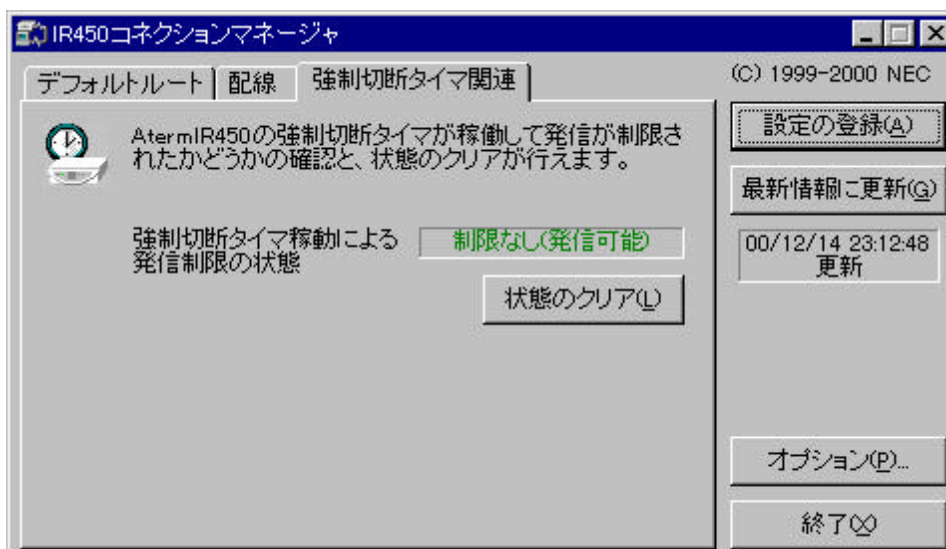
1.1 回線使用状態表示



回線の状態(B1/B2)

回線の状態を B1/B2 チャンル毎に表示します。回線接続中の場合は、それがアナログかデータ通信かの別も表示します。

1.2 強制切断タイマ稼働による発信制限の確認とクリア



強制切断タイマ稼働による発信制限の状態

AtermIR450 では強制切断タイマが稼働して回線が切断された場合、その後、発信が行えないようになっています。ここでは強制切断タイマが稼働して発信が制限されているかどうかの確認と、発信制限のクリア(発信可能にする)が行えます。

- ・制限なし(発信可能)
強制切断タイマによる発信制限状態ではありません。
- ・発信制限中(発信できません)
強制切断タイマが稼働し、発信制限状態です。再度発信を行うためには「クリア」ボタンを押してください。

1.3 注意事項

上記機能を有するコネクションマネージャを使用するためには、必ず本体ファームウェアのバージョンが2.60以降であることをご確認のうえご使用ください。
また、回線使用状態および強制切断タイマ稼働による発信制限の状態を確認する際は、必ず「最新情報に更新」ボタンを押して、情報を更新してから確認してください。自動的に更新はされません。

2 WWW ブラウザでの設定によるコネクションマネージャ機能について

バージョン2.60のファームウェアより、WWW ブラウザを利用してコネクションマネージャ機能の設定が行えるようになりました。これにより、ユーティリティのコネクションマネージャを使用できない環境でも接続管理が行えるようになります。WWW ブラウザでのコネクションマネージャ機能は「詳細設定」ページから「コネクションマネージャ」ページを表示させて設定できます。

2.1 最新情報に更新

最新の回線状態や設定内容に表示状態を更新します。表示状態は自動的に更新されませんので、複数のパソコンでコネクションマネージャをお使いの場合や現在の回線状態を表示させる際は、表示状態の更新ボタンを押してからご確認ください。(Ver2.61より追加)

▶最新情報に更新

現在の回線状態や設定内容を取得します。

2.2 回線状態

回線の状態を B1/B2 チャンネル毎に表示します。また、ルータ機能で接続した回線をすべて切断できます。。

▶回線状態

回線の接続状態の確認、接続中の回線の切断が行えます。

現在の回線状態 (B1) (B1チャンネルの接続状態とアナログ/データ通信の別を表示します)	未接続
現在の回線状態 (B2) (B2チャンネルの接続状態とアナログ/データ通信の別を表示します)	未接続
回線の全切断 (ルータ機能で接続した回線をすべて切断します)	切断のみ行う(自動接続禁止にしない) <input type="button" value="全切断"/>

現在の回線状態 (B1/B2)

回線の状態を B1/B2 チャンネル毎に表示します。回線接続中の場合は、それがアナログかデータ通信かの別も表示します。

回線の全切断

ルータ機能で接続した回線をすべて切断します。「切断と同時に自動接続禁止にする」を選択して[全切断]ボタンをクリックすると、回線を切断すると同時に自動接続を禁止することができます。

なお、データポートで接続した回線、アナログポートで接続した回線は [全切断] ボタンをクリックしても切断されません。

2.3 自動接続

デフォルトルートと自動接続するかどうかを設定できます。

▶自動接続

デフォルトルート(優先的にデータを送信する相手先)と、回線の自動接続を行うかどうかを設定します。

デフォルトルート (優先的にデータを送信する相手先)	64k
自動接続 (回線の自動接続を行うかどうかを設定します)	許可 禁止 許可 許可する際は必ずデフォルトルートで接続先を指定してください。

デフォルトルート

優先的にデータを送信する相手先プロバイダが変更できます。必ず登録済みの接続先を選択してください。デフォルトルートについて詳しくはデフォルトルートのページをご参照ください。

自動接続

パソコンからブラウザでホームページにアクセスしたり、電子メールを送受信しようとした場合など、TCP/IP アプリケーションからのリクエストがあった場合に、必要に応じて AtermIR450 が自動的に回線を接続するかどうかを設定します。コネクションマネージャでは、自動接続を禁止すると、自動的にデフォルトルートを「なし」に設定します。ただし、デフォルトルートを「なし」にして自動接続を許可できません。必ず登録済みの接続先を選択して許可ボタンを押してください。

2.4 その他

強制切断タイマの稼働による発信制限のクリアや、NetBIOS パケットのフィルタリング設定を行うことができます。

▶その他

強制切断タイマの稼働による発信制限のクリアや、NetBIOSパケットのフィルタリング設定が行えます。

強制切断タイマの稼働による発信制限 ([クリア]ボタンでタイマの稼働による発信制限をクリアできます)	制限なし(発信できます) クリア
NetBIOSパケットのフィルタリング (NetBIOSパケットをフィルタリングするかどうかを設定します)	フィルタリングしない する しない

強制切断タイマの稼働による発信制限

強制切断タイマが稼働して回線が切断された場合、その後、発信が行えないようになっています。ここでは強制切断タイマが稼働して発信が制限されているかどうかの確認と、発信制限のクリア(発信可能にする)が行えます。

NetBIOS パケットのフィルタリング

NetBIOS パケットのフィルタリングを行うかどうかを設定します。

NetBIOS パケットのフィルタリングを行うと、NetBIOS による共有機能を使用した場合の誤接続を抑止できます。ただし、USB ポートに接続したパソコンと 10BASE-T ポートに接続したパソコンとの間の NetBIOS による共有機能は使えません。

NetBIOS パケットのフィルタリングを行わない場合、USB ポートに接続したパソコンと 10BASE-T ポートに接続したパソコンとの間で、NetBIOS による共有機能を使うことができます。ただし、「自動接続を許可」の状態では NetBIOS による共有機能を使用すると、必ず回線を接続してしまいます。NetBIOS による共有機能を使用する場合は、必ず「自動接続を禁止」にすることをお勧めします。

2.5 注意事項

上記機能を使用するためには、必ず本体ファームウェアのバージョンが2.60以降であることをご確認のうえご使用ください。また、表示は自動的に更新されませんので、コネクションマネージャ機能をご利用の際は、必ず表示状態を更新してからおこなってください。

3 コールバックについて

従来、発信側（コールバックされる側）としか動作できませんでしたが、バージョン2.60のファームウェアより、着信側（コールバックする側）として動作が可能となりました。しかしながら、設定方法が従来マニュアルで説明してきたものと若干異なります。また、バージョン2.60のファームウェアでは、コールバック設定画面の表示が以前のバージョンと画面と同じですが、意味合いが異なることにご注意ください。お客様にはご迷惑をおかけいたしまして誠に申し訳ございませんが、バージョン2.60のファームウェアでのコールバックについては、取扱説明書「活用マニュアル第4版 70ページ コールバック」の記述は下記のように変更されますので、ご承知おきください。

コールバック

Ver2.60 以前

相手先と接続する際に、こちらから発信をいったん切断し、相手先から電話をかけ直してもら（コールバック）ことより接続する機能です。相手が MS-CBCP によるコールバック機能を持っており、Aterm からの発信をコールバックしてほしい場合に指定してください。

Ver2.60 以降

相手先と接続する際に、相手先から電話をかけ直してもらったり（コールバックされる）、相手先に電話をかけ直したり（コールバックする）することにより接続する機能です。相手先が MS-CBCP によるコールバックする機能を持っており、Aterm からの発信をコールバックしてほしい場合は、「着信設定」において相手からの着信許可「する」と、コールバックされる（クライアントとして動作する）ことができます。Aterm が MS-CBCP によるコールバックする（サーバとして動作する）場合は下記項目を指定してください。

MS - C B C P

Ver2.60 以前

MS-CBCP (Microsoft Callback Control Protocol) によるコールバック接続を行うかどうかを選択します。コールバック接続を行う場合は「使用する」を、コールバック接続を行わないを選択してください。初期値は「使用しない」になっています。

Ver2.60 以降

MS-CBCP (Microsoft Callback Control Protocol) によるコールバック接続を行うかどうかを選択します。コールバックする（サーバとして動作する）場合に「使用する」を指定して下さい。サーバとして動作する場合も、「着信設定」において相手からの着信許可を「する」に指定してください。いずれも初期値は「使用しない」になっています。

コールバック先電話番号

Ver2.60 以前

コールバック接続を行う際に相手先にかけてもらう電話番号（アドレス）を設定します。相手先がコールバック先電話番号を要求する場合のみ指定してください。

Ver2.60 以降

コールバック接続を行う（サーバとして動作する）際に、こちらからかけ直す（コールバックする）相手先の電話番号（アドレス）を設定します。指定しない場合は、ネゴシエーションの際に相手先がコールバックを要求してきた電話番号にかけ直します。

コールバック先サブアドレス

Ver2.60 以前

コールバック接続を行う際に相手先にかけてもらう電話番号のサブアドレスを設定します。相手先がコールバック先サブアドレスを要求する場合のみ指定してください。

Ver2.60 以降

コールバック接続を行う（サーバとして動作する）際に、こちらからかけ直す（コールバックする）相手先の電話番号のサブアドレスを設定します。コールバック先電話番号とともに指定しない場合は、ネゴシエーションの際に相手先がコールバックを要求してきた電話番号にかけ直します。



Ver2.60 以前

MS-CBCP コールバックは、Aterm が発信側（コールバックされる側）としてのみ動作可能です。Aterm が着信側となる場合は、必ず MS-CBCP コールバックは「使用しない」に設定してください。もし誤って使用した場合、通信が切れなくなる場合があります。なお、Aterm では MS-CBCP コールバックの指定できる接続先は一カ所のみです。MS-CBCP コールバックは、接続相手先（システム）によりコールバックに失敗することがあります。確実にコールバックされていることを確認するには、LCD 表示により、発信呼が切断され、コールバックの着信を受けたことを確認してください。

発信側として、MS-CBCP コールバックを使用する場合には、必ず MP・BOD 設定でマルチリンク通信を「行わない」に設定してください。

ルータ機能では、ステイルスコールバックは発信側と着信側、ともにサポートしていません。

Ver2.60 以降

MS-CBCP コールバックを利用する際は、コールバックする場合もされる場合も、「着信設定」において相手からの着信許可を「する」設定にしてください。

クライアントとして発信した場合、ネゴシエーションの際、ルータ本体の ISDN 設定で自アドレスとして指定した電話番号をコールバックしてもらった電話番号として使用します。設定していない場合は、接続相手先（システム）の設定内容に依存します。

MS-CBCP コールバックは、接続相手先（システム）によりコールバックに失敗することがあります。確実にコールバックされていることを確認するには、LCD 表示により、発信呼が切断され、コールバックの着信を受けたことを確認してください。

MS-CBCP コールバックを使用する場合には、必ず MP・BOD 設定でマルチリンク通信を「行わない」に設定してください。

ルータ機能では、ステイルスコールバックは発信側と着信側、ともにサポートしていません。

以上